

灰かぶりのエラ

作
ガラ林

登場人物

女
・
・
・
役者 囚われの身

男
・
・
・
役者 うず高い塔の少女を助けに来た男

1
・
・
・
役者 加害者であり被害者

2
・
・
・
役者 救済者かつ傍観者

3
・
・
・
役者 加害者であり被害者

5
・
・
・
役者 ネズミ カラス マッチ売り

※ この台本は 句読点 感嘆詞を使用せず ある程度のスペースを使って
はいるが 読み手の区切る為のそれではない

舞台は見えない壁で囲まれている 役者はその壁を自由に行き来する事ができる

役者は出番が終われば見えない壁を突き破り 袖から観客と同じ視線を舞台に向ける

女役的女優が位置に着く 役者と観客は舞台の真ん中に視線を向ける

女優は舞台に囚われているのである

女 「私は醜い灰かぶり 屋根裏部屋のその奥の埃を被った古時計 カチカチカチカチ刻むけど誰にもと
きは告げられず 椅子や机は灰かぶり誰にも知られず朽ちていく あく私だけが知っている もし椅
子や机に手足があつて言葉を発する口を付け考える頭があつたなら この高い塔の上の最上階更に上
つた屋根裏のこの薄暗くカビ臭いお荷物部屋から出してくれと叫ぶだろう」

男 「この高い塔の一番上にいるのは誰だ」

女 「あなたは」

男 「質問を質問で返すのかい」

女 「初めての人にその義理はないわ」

男 「確かに じゃあどうだろう 改めてこの非礼は詫びるとして」

女 「灰かぶり」

男 「灰かぶり」

女 「灰かぶりのエラ」

男 「灰かぶりのエラ」

女 「この高い塔の最上階より更に上にある屋根裏部屋の住人よ」

男 「屋根裏部屋」

女 「埃まみれの だから灰かぶり であなたは」

男 「僕は」

女 「やっぱりそれは聞かないわ」

男 「なんで」

女 「それを期待してしまう女は哀れなもの」

男 「損はさせないよ」

女 「大した自信ね」

男 「だってそうだろう 塔のてっぺんに閉じ込められたお姫様を助けに行くのは決まって」

女 「ちよつと待って 誰がお姫様だつて」

男 「君だよもちろん」

女 「やめてちょうだい冗談は」

男 「だって僕は聞いたんだ この森の奥には天に届く程高い塔があつて その最上階には美しいお姫様
が悪い魔女に閉じ込められてるって」

女 「確かにその話はそう」
男 「なら」
女 「さつきも言ったわ聞いてなかった この窓はあなたが言うその塔の最上階より更に上にある屋根裏部屋 あなたが言っている悪い魔女に閉じ込められた美しいお姫様のいる所はこの一つ下」
男 「一つ下」
女 「そうよ」
男 「じゃあ君は」
女 「私は・・・だから灰かぶり イプセンの人形の家 主人の機嫌で捨てられる哀れなドール」
男 「エラ 僕はじゃあまず君に会いに行くでしょう」
女 「なんの間違い 目指すは一つ下の階なのよ」
男 「いやまず君に」
女 「やめてちょうだい 私はお姫様じゃない今は塔の上だから顔が見えないだけ せっかく上ってきてもあなたをがっかりさせるだけよ」
男 「それは僕だって一緒だよ この顔をみれば君に失望されるかもしれない だから頼むそれはお互い様ということですからその窓の道しるべに何かをしるしてくれないか」
女 「道しるべ」
男 「明かりでも何でもそこに君がいると思えばこの気の遠くなるほどの高さも紛れると言うもの」
女 「ここは屋根裏部屋 そんな人に都合の良いものなんてない ここは人が不必要になったものばかりが閉じ込められている」
男 「君も」
女 「・・・そう」
男 「じゃあその不必要を僕の必要にするよ」
女 「執拗なほどに求められると逆に怪しくなってくる」
男 「それでもいい」
女 「じゃあ・・・」
男 「これは」
女 「私の髪の毛」
男 「どれだけ長いんだい」
女 「この高い塔程に途方もない年月を掛けて伸ばしたの だから分かる 私はあなたが思う生娘ではないのよ」
男 「それはお互い様 国を治めず世界を何年も旅して周り森の奥の塔のところまで来た 僕だって若葉じゃない 掴むよ」
女 「・・・」
男 「痛い」

女 「いいえ」

1 「エラ エラ」

女 「はい」

2 「靴はどこ」

女 「はい」

1 「上着は」

女 「はい」

2 「エラ靴」

女 「はい」

1 「エラ上着」

女 「はい」

1 「トトロトロするんじゃないよ 今宵の舞踏会は特別なのさ」

女 「特別」

2 「なんとたつて王子様の」

女 「王子様の」

2 「やめときな お前には関係のない話さ」

女 「・・・」

1 「何を言っているのお前お触れを読んでいないのかい 今宵の舞踏会は王子の花嫁を決める大切な催し物 王様はこの国 いやどの国の女も来るものは拒まずって言っているんだ」

女 「えっ」

2 「お母様 今この娘顔を赤らめたわ 私を先置いて」

1 「聞いてなかったのかいお前 今日ばかりはこのエラにだってそのチャンスがあるとあの王様が言うてくれるんだ さあエラ お前も用意をするが良い」

女 「・・・」

1 「ほら・・・どうした用意をしな 外の馬車は待ってくれないよ」

2 「・・・フッフ」

女 「その」

1 「どうした人生で最後のチャンスかもだよ もしお前が王子様を射止めたらこんな生活からおさらばだよ もう私にこうやって小突かれることもない」

2 「もう私の世話をすることもない」

1・2 「ハハハ」

女 「・・・」

2 「なんだいその目はその反抗的な目は つまりお前は私たちより自分を美人だと思っているのよ 自

分が舞踏会にさえ行けば王子様が見初めてくれると

「そんなこと」

「思っていないの」

「思っていないせん」

「本当に」

「健気な娘だよ」

「それに私にはそんな舞踏会に着ていく綺麗なドレスはありません」

「貸してやんなドレスを」

「はい」

「貸してやんな靴をバッグを」

「はい」

「化粧もしてやろう なんなら私の指輪もくれてやる さあこれでお前はもう言い訳できないよ
これ王子様に見初められなかったらお前はこれから一生ただのクズだ さあ行こう その手をお貸し
引いてやる」

「・・・やめて下さい」

「まあなんてこと」

「・・・大変有難い申し入れですが 今この辺は窃盗団が悪さをしていると持ち切りです 私がこの
家を守らなくて誰が守りましょうか」

「良いんだね連れて行かなくて」

「・・・はい」

「後で後悔しないね」

「はい」

「せっかくのチャンスなのに」

「ねえ〜」

「・・・」

「まあ良い選択といえば良い選択をした」

「それでお前はこれ上下に落ちなくて済む。」

「さあさ母上様達そろそろ時間です これ以上私に時間を使うのは無駄でございます」

「じゃそこまで言うなら置いて行こう」

「綺麗なドレスだってあると言っうのに」

「綺麗な靴やバッグや宝石も なのにあの子の顔じゃしょうがない」

「ハハハ」

女 「・・・」

5 「泣いているのかい」

女 「あなたは」

5 「鳥だよ 空を飛んでいる最中あまりにも悲しい声が聞こえるものだから ついこちらへ降りてきてしまったんだ」

女 「それはごめんなさい きつとあなたは渡り鳥 これから暖かい南へと飛んで行くと言うのに」

5 「なぜ舞踏会へ行かなかったんだい」

女 「だって私なんかが行ったところでこの顔を笑われるだけ」

5 「顔だけで決まるのかい 顔だけで決めるのかいこの王子は」

女 「そうでしょ シンデレラストーリーってあるでしょ知らないの」

5 「エラ 灰かぶりのエラ もしもそのシンデレラが君だったとしても君はそうやって自分を卑下して

女 「ここから出ないのか」

女 「出たいわよ 出たいに決まっている」

5 「じゃあ自分で掴めば良い その自由を僕みたいに」

女 「私は人間 あなたのように翼はないわ」

5 「じゃあ・・・私が都合をつけてあげようか 美しいドレスに美しい靴 しかもそんじよそこの靴

女 「じゃない ガラスの靴だ」

女 「ガラスの どうして鳥のあなたが」

5 「鳥は美しい物には目がないのさ さああまり時間はないよ 僕はそのハシバミの茂みの中にたくさんの宝を隠しているのさ この秘密は君と僕だけのもの 決して他言無用でお願いするよ そろそろ僕の仲間が馬車の手筈をつける頃だ さあこの翼を貸してあげよう」

1 「ハイホーハイホー」

2 「あく疲れた今日も あく眠い」

3 「うお〜うお」

1 「なんだドービうるさいな」

3 「うああああい、うああい」

1 「何言ってるんだコイツ」

3 「うあうい、うあうい」

1 「あくあ、シラユキね・・・っておいまさか逃げたのかあの女」

3 「うあい うあい」

1 「あの女 森で迷ってるところを助けてやったのにここに来てとんずらか」

2 「そんな野蛮な言葉を使うもんじゃありませんよ」

1・3 「ドグ」

2 「シラユキは逃げ出したわけじゃありません そろそろすよねシラユキ」

女 「はい」

1 「なんだいたのかよ」

女 「ごめんなさい 食事の用意をしようと思って山の奥に」

3 「……………」

1 「とにかく腹が減ったんだから飯作ってくれよ」

女 「はいはい」

2 「シラユキ 服汚れちゃった洗濯して」

女 「はいはい」

1 「シラユキ 眠いよお布団」

女 「はいはい」

3 「あうい」

女 「はいはい」

2 「シラユキ」

女 「はいはい」

1 「シラユキ 喉渴いた」

女 「はいはい」

3 「ウアウア」

女 「はいはい」

1 「シラユキ くしゃみ ティッシュ」

女 「はいはい」

1・2・3 「シラユキ」

女 「なに」

1・2・3 「……………」

1 「怖いよ、シラユキ」

女 「ごめんなさいつい……なんか変なことを思い出しちゃって」

2 「みんな……シラユキは疲れてるんだ」

1 「働いてきたのは俺たちだぜドグ」

2 「スリーピー」

1・3 「……………」

2 「シラユキ」

女 「ごめんなさい大きな声を出して」

2 「何かあったのかな」

女 「少し思い出しちゃって」

2 女 「昔のこと」

2 女 「うん」

2 女 「お城にいたときのこと 悪い継母にいじめられていた時の事」

2 女 「うん」

2 女 「・・・そっか」

2 女 「ごめんなさい みんなを呼んできてドグ キノコのスープを作るから」

2 女 「今日は良いよ 裏山の野兎でも齧らせとくさ」

2 女 「野兎を」

2 女 「そう」

2 女 「齧る」

2 女 「そう」

2 女 「生で」

2 女 「そう」

2 女 「そう」

2 女 「そう」

2 女 「そう僕たちドワーフだよ」

2 女 「そっか」

2 女 「そうだよ」

1・3 女 「ムシャムシャムシャ」

2 女 「うわっ何か心地よい音」

2 女 「一つ良いかなシラユキ」

2 女 「なに」

2 女 「本当にこんな深い森の方が良かった 本当はお城での暮らしが良かったんじゃないか」

2 女 「その話は もうしない約束でしょ」

2 女 「でも」

2 女 「お願い」

2 女 「君はここにいない方が良いんじゃないか お城にいれば王子様と君は結ばれるわけだろ こんな森の深いところには王子様はおるか白い馬だつて寄り付きはしない」

2 女 「王子様」

2 女 「そう王子様 君はこんな所にいるべきではない 王子様と幸せになるべく生まれたんだ」

2 女 「そんなの無理よ 王子様がこんな私を愛してくれると思う」

2 女 「もちろん」

2 女 「幸せにしてくれると思う」

2 女 「もちろん」

2 女 「・・・そう そうなら嬉しいなあ」

女 2 「え」

女 2 「そうなら嬉しいなあやっぱり」

女 2 「じゃあ戻りな 帰り道の道しるべに石ころを置いて来たんだろ」

女 2 「でもあなた達を置いて私はいけない」

女 2 「いけない」

女 2 「……」

女 2 「……」

女 2 「あ 逆に重いかこんな言われ方したら」

女 2 「ハハハ」

女 2 「ハハハ じゃあ僕も野兎を齧って来ようかな」

女 2 「プフフ」

女 5 「……(コンコン)」

女 5 「はい」

女 5 「怪しい者です」

女 5 「はい」

女 5 「怪しい者と聞いてドアを開ける あなた何か私に求めるものがあるんですね」

女 5 「いいえ」

女 5 「それは一応の否定と受け取りましょう」

女 5 「助かります で今日は」

女 5 「リンゴを買ってくれませんか」

女 5 「リンゴ」

女 5 「リンゴです」

女 5 「……」

女 5 「買わないですよね」

女 5 「しだいによります」

女 5 「しだいにしだいに」

女 5 「寄りますね」

女 5 「この方が密に話せる」

女 5 「甘いリンゴの密の話」

女 5 「と言うことは」

女 5 「だってリンゴを売りに行くなら人の多い市場に行くのが普通でしょう」

5 「つまり私が普通じゃないと」
女 「そう結論は急いでいません」
5 「私は老婆 行く先は短いので」
女 「急ぎますか」
5 「次がありますので 一分一秒無駄にたくありません」
女 「だからここに来た」
5 「話が早い」
女 「こんな深い森の奥にリンゴを売りに来るなんて普通ちよつと考えれば分かります そのリンゴに細工があると」
5 「なら財布は緩みます」
女 「その細工しいでは」
5 「このリンゴは」
女 「皆まで言わないで下さい 私この手のおとき話知っています 私の美貌に嫉妬して私を殺そうと言
う魔女のリンゴでしょ」
5 「ありや手が古かった」
女 「逆に助かります 古典の毒なら強力だ」
5 「で 齧るので 齧ってくれるので」
女 「自らの手で命を断つ」
5 「あなたそれ程ここにいたくないと」
女 「誰もそんなことは言ってません シツ静かに」
1 「・・・ヘンゼル ヘンゼル返事をおし」
女 「はい」
1 「グレーテル グレーテル返事をおし」
2 「はい」
1 「お前は兄貴が喰われても良いのか 嫌なら掃除をしておいで」
2 「・・・」
1 「返事をおし」
2 「・・・」
1 「行ったか」
2 「いるよババア」
1 「この不良めあっち行け しかしヘンゼルお前は素直な良い子だ 私の言うことを聞いてこの檻の中
でブックと太っていることだろう、さあ、その腕をさわらせてごらん」
女 「・・・(骨)」

1 「なんだいこの骨のような細っこい腕は 本当にお前は私の作った食事を朝昼晩と食べているのか
い」

女 「・・・」

1 「ほらそうやって都合が悪くなるとだんまりだ でもお前はあの不良娘と違ってそこにいる なぜっ
てそこは鍵のかかった鉄の檻だからね、いくらだんまりを決め込んでもこの上の鍵がなければそこから
出ることはいできない。ハハハ・・・。無視しても無駄だよ、いくら私が先の見えぬ盲の魔女だってお前
がそこにいることは分かっている ヘンゼル出てこい出てみる 出てこい出て来れるものなら出てこい
出てみる 出てこい出て来れるものなら」

女 「やめてください」

1 「あー最近耳も遠いからのお」

女 「やめてください そうやって大きな音を出すのは まるで運命がドアを叩くように」

1 「何故お前そんなところに閉じこもっている
それはお前がここに入っていると命令したからだろ」

1 「じゃあ命令してやる そこから出てみる」

女 「出せ出せ鍵を貸せ 出てやる出てやるから鍵を寄越せ」

1 「ヒヒヒこちだこちだ・・・鍵はこちだ・・・」

女 「出てやる いつか出てやるあのクソババアめ 今に見ているグレーテルさえいなければあいつの自由
なんかにさせないのに」

2 「呼んだ」

女 「・・・おお」

2 「お兄ちゃん。私がいなければ良かったの」

女 「グレーテル」

2 「なぜそこから出ないの」

女 「なぜってここから出たらお前の命が危ないからに決まってるだろ」

2 「決まってる、だから捕まってるの」

女 「そう」

2 「お兄ちゃんが逃げないのは私の命が危ないから、なんで」

2 「魔女に殺されるからだろ」

2 「誰が」

女 「お前が」

2 「どうして私が」

2 「だからあいつは魔女だぞ」

2 「魔法が使えるとでも言うの、私から言えば盲の老婆よ、後ろからちよいと押してやれば、かまどの火
の中に簡単に突き落とせる」

女 「お前」

2 女 「かもしれない」

女 「……」

2 女 「お兄ちゃん だから私は大丈夫なの 何信じてるの まさかあのババアが魔法が使えるとでも 手から火の球を出しその姿をドラゴンにでも変えろとでも」

女 「だから」

2 女 「だから私は大丈夫だから早くそこから出よ」

女 「だから」

2 女 「だから何……じゃあ私がやっちゃおうかな……やり方はこの本に書いてある 兄妹はそのあと 魔女の隠し持っていた財産で楽しく暮らしましたとき ホラ書いてある」

女 「やめとけ」

2 女 「え」

女 「やめとけ」

2 女 「え」

女 「やめとけ そんなおとぎ話のように人生うまくいくわけないんだよ」

2 女 「へえ〜」

男 「おーい おーい」

女 「あなたは」

男 「忘れてしまったのかい 酷いなこんな高い塔の屋根裏部屋まで登って来たと言うのに 君の髪の毛を伝つてね 酷いのは僕の方か」

女 「何でそこまでして」

男 「それはそれは君にある 何故君はこんな高い塔の最上階の更の上の屋根裏部屋に閉じ込められてるんだい それには二つ理由が考えられる 君がよっぽどの罪人か 君が呪いにかけられたお姫様っついでに」

女 「お姫様」

男 「僕は後者だと踏んでいる」

女 「何を根拠に」

男 「だってこんな高い塔に命綱なしに王子が登って来たんだ。相手はお姫様じゃなきゃ釣り合わないよ」

女 「王子様 あなたが」

男 「高さの都合上白馬には乗ってないけど」

女 「王子様」

男 「僕じゃ不満」

女 「いや」
男 「さあ行くこう　ここから連れ出してあげる」
女 「ゴメンなさい　あなたの期待には応えられないの」
男 「何故」
女 「だって私・・・お姫様じゃないもの　ただの平民　ただの屋根裏の灰かぶり」
男 「シンデレラって話知ってる」
女 「ええもちろん」
男 「シンデレラの王子は平民の子と結ばれたよ」
女 「でもシンデレラは美しい少女だった」
男 「見たのかい君はシンデレラを　シンデレラが実は心の優しい女性だったとは思えないのかい。それに僕だって世界を飛び回って麗しの人を探し求めたんだ、もう良い年だ、頭のおかしい王子だと後ろ指をさされてるよ」
女 「私で良いの」
男 「君が僕を選んでくれるなら」
1 女 「エラーエラー」
女 「隠れて」
男 「何で」
女 「良いから」
1 女 「エラー」
女 「はいお母様」
1 女 「あなた今日本当にずっとこの部屋に居たの」
女 「はいお母様どうしてそんな事を」
1 女 「今日王子の妃を決める舞踏会に」
女 「舞踏会」
1 女 「王子が来なかった」
女 「来なかった　王子様が」
1 女 「そう　どこかに消えたのかもしれない」
女 「消えた」
1 女 「お城の階段には女ものの靴が片方意味深に落ちていて」
女 「靴」
1 女 「しかも・・・ガラスの靴　ちょうどあなたが履いたら似合いそうな」
女 「まさか」
1 女 「そのまさかには何か思い当たる節があるの」

2 「ホラ出たそれがお前の真意 すぐに本音がポロリと落ちる」

女 「涙のように」

2 「泣いたからって離さないよ そこを開けな」

女 「私の手で」

2 「そう自分の手でドアを開く そして一歩踏み出せ」

女 「できるかしら」

2 「じゃ今までどうやって生きてきたんだい ドア一つ開けるのに躊躇するお前が」

女 「せめて予行演習を」

2 「自衛隊か貴様― 実弾で人が撃てんのか」

女 「ノックを」

2 「ノックを」

2 「ノックを一度だけお許しを」

2 「そこにまるで誰かいることを教えるように それはドアの奥に教えているのかい それとも私が気付かないバカだと思っているのかい」

女 「どちらとも」

2 「強く言われるとさすがに怯む じゃあ許そうその予行演習」

女 「誰もいませんね（ノック）」

2 「さすがにバカと言われた私だって気付くぞそのわざとらしさ」

女 「誰もいません だからドアからノックは返ってきませんよ（ノック）」

男 「（ノック）」

2 「・・・今返ってきたね このバカでも分かるわざとらしさに応えた大バカがいたね」

5 「・・・」

2 「鳥」

女 「青い鳥 幸福の幸福の幸福の」

1・3 「・・・コホン・・・コホン」

女 「ドグ」

2 「残念ながら」

女 「うろう」

2 「長くありません」

女 「長くない 後どのくらいで」

2 「二、三十年もてば良い方かと」

女 「長つ あ、ごめんなさい 思わず」

2 「良いんだ私たちドワーフは君たち人間と違って長生きだから」

1・3 女 「シ、シラユキ」
女 「なーに 何でも言っ」
2 「それにしてもあんなに元気だったこの二人が何故急に寝たきりに」
女 「私」飯の用意をしてくるわね ドグ今日こそは食べるよね」
2 「えっ・・・僕は野兎を齧るのが好きなんだ」
女 「そう じゃあ仕方ないわね 今日みんなの大好きなリンゴのお粥よ」
2 「あのシラユキ」
女 「なーに」
2 「君の料理の腕前についてあれこる言う気はないが君の料理のセンスに関しては」
女 「なーに」
2 「何も 僕には野兎が一番」
男 「・・・そこに居るのは君か」
女 「私です」
男 「君の名は」
女 「知ったように君と話し掛けておいて それは何の手口」
男 「君への入口」
女 「あらお上手 では中に入って下さる」
1・3 女 「コホンコホン」
女 「とんだコブ付きで驚いたでしょ」
男 「そんな事はないよ 僕にだって大きなコブは付いているんだ」
女 「女の手はどこを握らせようと言うの」
男 「国さ」
女 「ッ」
男 「ほらギョツとした いつもそう 僕が国の王子と分かるとその責任の重さに女はギョツとする」
女 「ギョツとしてません」
男 「なら」
女 「いやギユツとしたの」
男 「君ね気を持たせるようなことしないでくれる」
女 「だってギョツとギユツとじゃだいたいぶ違う」
男 「違うにしても僕から一歩離れたのは違うの」
女 「王子様が私を そんなの夢よ」
男 「夢じゃない 君さえ良ければ外に白馬は待たせてある なんなら見るかい王子の白い歯」
女 「眩しい」

男 「眩しいぐらいの世界が待っている さあそんな澱んだ森の奥から飛び出して」
女 「……」
男 「どうしたの」
女 「無理です 私なんかには勿体無い話です そんな森の奥から澱んだ私を連れ出してくれるなんて」
男 「澱んでいるのは君じゃない 森の方だよ」
女 「澱んでいるのは私です それに私これ置いていけません」
1・3 「シラユキこれって」
男 「君これ」
女 「あれこれききます」
男 「根掘り葉掘り」
女 「とぼりはまだ」
男 「ほとぼりが冷めぬうちに」
女 「外堀から」
男 「埋めます」
女 「どうしましょう どうしましょ」
5 「何を焦っておいでで」
女 「あなたは魔女」
5 「私を魔女と言うならこの手に持っているのは毒リンゴ 私はそれをあなたに売った」
女 「しー」
5 「くれつとにびーくわいえっと 私を老婆にするが良い」
女 「はい」
5 「たちまちリンゴは津軽に変わる」
女 「あら美味しそう」
5 「ゴラ 呼び名は変わっても中身はマンマ」
女 「おまんま」
5 「何でもおを付けるんじゃない 時に下品だよ」
女 「で」
5 「次は何が欲しい」
女 「何故分かります」
5 「で、は出せ出せと言う漢字で表せる」
女 「出して欲しいんです、強い奴」
5 「強い薬」
女 「私今にでもここから出たいんです」

5 「待つてはくれませんか」
5 「一、三十年というのですドグの見立てでは 待つてくれるでしょうか先方は」
5 「保証はできません ただ」
5 女 「ただ」
5 「そこに愛があれば」
5 女 「そこに愛はありません 君の名はとまだ名は呼ばれず聞かれただけ」
5 女 「それで踏み切るあなたもあなただ」
5 女 「そこに締切があったので」
5 女 「締め切ったのは誰ですか」
5 女 「えっ」
5 女 「良いでしょ 出しましょ やばい奴 強い薬、それであなたのお役に立つなら」
5 女 「おを付けると時に下品になりますわよ」
5 「マタ」
1 女 「・・・」
1 女 「・・・」
2 女 「どれだけ経った」
2 女 「だーいふだよ お兄ちゃん」
2 女 「僕をここから出してよグレーテル」
2 女 「どうぞ」
2 女 「鍵がない」
2 女 「いつも鍵がないせいにする」
2 女 「だってそうだ」
2 女 「フフ」
2 女 「なに・・・それ」
2 女 「お兄ちゃん」
2 女 「それが僕」
2 女 「そだよ」
2 女 「動かないのかい」
2 女 「シンデル グニグニのブヨブヨ」
2 女 「食べられるのかい あの盲の魔女に」
2 女 「いや、腐ってる 大分経ってる」ここで
2 女 「シンデル」
2 女 「ヘンゼル」

女 「・・・何がしたいんだ あめくら 僕を食べるためにこんなところに押し込んで結局食わずに腐らせた」

2 女 「腐る前にだから出よう」

2 女 「だから鍵がない」

「またそればかり」

5 女 「・・・」

5 女 「君は」

5 女 「ネズミです」

5 女 「齧るのかい」

5 女 「はい なんなら齧りましょうかこれも」

5 女 「やめといた方が良く いくらネズミ君の歯でも鉄の檻じや歯が立たない」

5 女 「ええ それはもちろん知っています」

5 女 「・・・え」

5 女 「だからって諦めるの嫌なんです」

5 女 「ちよつと待って」

5 女 「待ちましょう」

5 女 「初めてだよそんな前向きなネズミ」

5 女 「逆に見たことありますか、後ろ向きなネズミを」

5 女 「他にネズミの知り合いがないもので」

5 女 「僕らは何でも食い破るのです だから人間は恐れてこのお菓子の家を建てた」

5 女 「お菓子の家なら壊すのは簡単だ 壁はクッキー ドアはチョコレートだもの」

5 女 「そう 私もそう思った しかし実際はどうだ 見てよこの前歯 今じゃ虫歯だらけ」

5 女 「うわ〜」

5 女 「やられたのさあいつらにあいつらの知恵に人間にまだ潜ませたヒ素を毒団子にしておいてくれていれば良いもの」

5 女 「でもここは盲の魔女のお菓子の家 ヘンゼルとグレーテルの」

5 女 「魔女だって人間さ」

5 女 「じゃああの物語は」

5 女 「人間の子供が人の親を殺した」

5 女 「じゃあこの物語は」

5 女 「それは君次第さ この目の悪い光を失った腰の曲がった魔法も使えない老婆の背中を押して燃え盛るかまどの中に押し込むも良し また永遠に近い年月 この鉄の檻が腐り落ちる時まで骨としてここに留まるかネズミは君に力を貸すよ 例え僕の歯が使い物にならなくなって命尽きても 次は僕の息

子がその次は孫が この鉄の檻を齧ってあげる永遠に」

「そんな義理はないよ」

5 女 「君になくたって僕にはある ねずみは人間には嫌われ者さ でも君は僕たちネズミと口を利いてくれた」

「・・・友達」

5 女 「そう呼んでくれるならもう百年を共にするよ」

男 「誰と話しているんだいエラ」

女 「ネズミ」

男 「ネズミ」

女 「あら こんなことで驚くようじゃこれからの私の話はまともじゃ聞けなくてよ」

男 「じゃあひとまず興味本位と言うことで」

女 「平民の不平不満の目安箱のように」

男 「なんとも」

女 「將軍さまのお耳に入れば良いけどこの目安箱の中身でもこの目安箱その基準になるかしら」

男 「その目安はどんな目盛を指しますか」

女 「平民よりも更に下の下民の不平不満はあんな小さな箱じゃ収まりきらない」

男 「じゃあ大きいのを用意しよう 言ってくれ 僕はこの国の王子だよ この国で不可能なことはない」

女 「じゃあこの部屋ほどの大きさで」

男 「この屋根裏部屋 ハハ もっと無理難題を押し付けられるのかと思ったよ」

女 「ねえ それより良いの お姫様に会わなくて」

男 「エラ 君ともう会ったよ」

女 「この塔に住むと言うお姫様 私はこの塔の最上階のもっと上 屋根裏部屋の灰かぶり 他人よあなたの望む人とは」

男 「僕がいつ君以外の人を望んだ 履いてくれないかガラスの靴」

女 「私は灰かぶりのエラ あなたとは住む世界が違う 私は埃を被った人形 動くことなくただ時間だけが過ぎて行く」

男 「イプセンの人形の家だって最後は女が裸足で駆け出した」

女 「男はいつもそう 女を挿んでポイ挿んでポイ お気に召すまま」

男 「僕なら君を離さない 僕を主人に」

女 「あなたを主人に」

男 「もう離さない もう帰らぬではない」

女 「いや 主人は帰ってくるわ」

数々の寓話が徐々に本来の姿を現し始める

3 「・・・(ノック)」

1 「お帰りなさいあなた」

2 「お帰り。パパ」

3 「あー帰ったよ ほらチョコだよ」

2 「うわーい」

男 「これは何とも幸せそうな家族」

5 「そうでしょう 暖炉を囲む姿は幸せそのものだ」

男 「君は」

5 「私は幸せの青い鳥 幸せな家を覗き見ては飛んでいる」

男 「じゃあここも」

5 「はい しかしおかしな 家族は三人食器は四組 誰か一人抜けているのか」

男 「じゃあ灯しましょう」

5 「マツチを擦って 寒い外ならそれが似合う」

男 「はい」

女 「パパとママに言われなくてもしつかり自分からもっと今日より明日は出来る様にするから昨日全然できなかったこと これまで毎日やっていたことを直す これまでどれだけアホみたいに遊んだか、遊ぶつてアホみたいだからもう絶対やらないね 絶対約束します。パパママもうお願い 許して下さい お願いします 本当に同じこととはしません 許してお願いします お願いします」

3 「ねえママ・・・そう言えばあの子は」

1 「あの子は今奥の部屋で反省していますよ」

2 「お姉ちゃん勉強してた」

3 「それは偉いじゃないか 奥の部屋は寒いだろ もう良いんじゃないかママ」

1 「あなたがそう言うのなら エラー エラー」

女 「・・・」

1 「エラー 何してるの 聞こえないの」

女 「聞こえています まだその終わっていないので」

1 「パパがもう良いからこっちに来なさいって」

女 「でも」

1 「この部屋は寒いでしょう あっちの部屋なら暖炉があるからさあ 暖まりなさいって。パパが」

女 「でも・・・まだもう少し勉強したいし」

1 「あなたは私が血が繋がってないってそれでいつも言うことを聞かないの」

女 「違うよ 違うよ」

3 「どうしたママ」

1 「この子、私が血の繋がりが無いからって言うことを聞かないんです」

3 「そんな事はないだろ。そんな事ないよな。さあおいで」

女 「・・・」

3 「新しいママだつて頑張ってくれてるんだ。ちゃんと言うことを聞くよな。これは、パパからのお願いだ。さああったかい暖炉の部屋に行こうエラ」

女 「でも」

男 「あ。マツチが消える」

5 男 「さあ次を擦って」

男 「はい」

3 女 「うわいうあいうあ」

3 女 「しつかりしつかりしてドービー」

3 女 「うわいうあ」

女 「何が言いたいの」

1 女 「おむつだよ。おむつ。この臭い分かんないのかよ」

1 女 「スリーピーごめんなさい。ありがとう訳してくれて」

1 女 「替えてやれよ」

女 「え」

1 女 「おむつ。ドービーも喜ぶよな。ドービー」

3 女 「うはうはうは」

1 女 「ほらほら」

女 「うん」

1 女 「終わったら私のも替えてよ」

女 「え」

1 女 「おむつ」

1 女 「スリーピー」

1 女 「そうさ私は寝たきりだ。こいつみたいに徘徊できないのさ」

女 「はい」

1 女 「もう良い漏らすからそれより腹減ったから」

女 「え」

1 女 「腹減ったから早く飯」

女 「はい」

男 「これは」
5 「これもまた幸福な家族だね」
男 「これが幸せ」
5 「幸福だよ 愛だよ」
男 「愛ですか」
5 「愛がなきゃここままで尽くせないでしょ」
男 「でも」
5 「それでも君は彼女をここから引き離せるのか」
男 「それは」
2 「・・・シラユキ」
女 「ドグ」
2 「思わしくないようだねあの二人」
女 「うん」
2 「長くないようだ 少なく見積もってあと二、三十年」
女 「そんなに」
2 「ごめんよ ドワーフは君たちと違って長生きなんだ」
2 「・・・そう」
2 「でもその二、三十年が今呟いたそんなにと言う言葉を引き出すためのブラフなら君はどうする」
女 「・・・」
2 「ここを出ても良いんだよ 僕たちを置いて」
女 「ドグ」
2 「ドクターと呼んでくれ ちゃんと」
女 「ドクター 先生 私は幸福です あのふたりを見捨てる訳には行きません 私がこの迷いの森で死な
ずに今まで生きてこれたのは紛れもなくあの二人のお陰なのですから」
2 「また来ます」
男 「揺らぎます」
5 「炎が」
5 「いや心が 私は本当に彼女を迎えに行くべきなのでしょうか」
男 「迎えに行くのはあなた次第 後ろに乗るかは彼女次第」
男 「揺らぎます」
5 「心が」
男 「いや炎が もう消えそうです」
5 「マツチを擦ってそれが最後の一本です」
男 「はい」

女 1 「……なんだいその骨のような細っこい腕は お前は本当に私の作った食事朝昼晩と食べているのか
」と
女 「はい」
女 1 「答えた」
女 「それは答えます」
女 1 「その檻の中に居ても」
女 「檻と言えどこの家の中にある箱ですから」
女 1 「顔をみせておくれ」
女 「お好きに」
女 1 「それをこの旨に言うのかい」
女 「それはそっちの都合だろ」
女 1 「やたら乱暴な言葉を遣うのは何故」
女 「ここに囚われた後遺症とでも言おうか」
女 1 「囚われた 誰が」
女 「僕たち兄妹が」
女 1 「兄妹」
女 「グレーテルはどこだ 随分と姿を見なくなったようだけど」
女 1 「出て行つたよ」
女 「いつ」
女 1 「二十年前に」
女 「ハッ二十年前に 何故もつと早く言わない」
女 1 「気づかない方が異常だろ」
女 「ここから出せ」
女 1 「どうぞお願いします」
女 「はっ」
女 1 「鍵はかかっていますから」
女 「鍵を開ける」
女 1 「鍵は持っていません 鍵がかかっているのはその部屋の内から」
女 「うわっっ」
女 1 「見てくださいよ 私 見えますか あなた 見てくれませんか あなた 見えますでしょうか私二十
年です あれから」
女 「あれから」

1 「そこに囚われてからそして同じこの檻の前に私が囚われてから」

女 「はあ」

1 「あなたがそこから出てくれば 私も自由になります ですのでお願いです」

女 「そうやって魔女は少年を騙すんだ 出たところを捕まえてかまどにくべた火に僕を突っ込んで殺すんだ 出てやるもんか」

1 「いつまで あとどれくらい」

女 「二十年でも二十年でも」

1 「とんだ我慢比べだ そこまで私の命は持ちますか」

女 「そうすれば僕の勝利だ そう本にも書いてある 魔女を退治したヘンゼルとグレーテルは魔女の隠し持っていた財産で楽しく暮らしましたとさ」

1 「暮らせませすか」

女 「暮らしますとも」

5 「どうします」

男 「どうしますとは」

5 「これはお姫様のいない物語 王子のあなたが首を突っ込んでもしようがないのかもしれないかもしれませんよ」

男 「それでも灯します」

5 「煌々と」

男 「私の光で良いのなら煌々と おや と疑問をつけて」

5 「じゃあどうぞ」

男 「エラ・・・エラ」

女 「・・・」

男 「どうしたんだい その痣 また継母のあいつにやられたのかい」

女 「ママのことをあいつ呼ばわりしないで いくらあなたでも」

男 「僕はもう我慢できない 君をここから連れ出すよ」

女 「この塔から下までいくつ階が続くか分からない程高いここから」

男 「登って来たんだ 降りるなんて訳はない」

女 「外からはね でもこの塔の内部は複雑な迷宮になっている 何年いや何十年かかるか分からないよ」

男 「それでもこの痣を見た以上 それにしても何故君の父親はこんな君を放っておくんだ」

女 「パパは関係ない」

男 「本当の父親だろ 継母のあいつとは違う」

女 「それ以上パパのことは言わないで それ以上言うと言つのならここから出て行ってもらうわ」

男 「君は僕を追い出すと言うのか ここまで登って来た僕を」

女 「出口はあちら、窓の外になっております」
男 「窓の外まだ外は冬の寒空」
女 「それでも容赦なく」
女 「さぶいさぶいさぶい……もう許して下さい もうやりません 本当です 中に入れて下さい」
3 「嘘つけお前」
女 「本当です だからいれてください お父さんお母さんお願いします」
3 「パパだろ ママだろ」
女 「パパ ママ もう許してください もう悪いことはしません」
1 「あなた」
3 「あくお前どっちの味方だ」
1 「やめて下さい」
2 「やめてよパパ」
3 「……良い子だなお前は」
男 「(ノック) すみません すみません」
1 「はい」
男 「あのすみません 私児童相談所の者なんですが開けて貰えますか」
1 「ッ」
3 「出るよ」
1 「はい」
男 「すみません 近所の方から通報がありまして ベランダに女の子が薄着で放り出されていると聞きまして 今私が見た限り二階のベランダに女の子がいるのを見まして」
1 「はあ」
男 「お母さんですよ」
1 「え はい」
男 「お母さんじゃないんですか」
1 「血の繋がりは」
男 「そうですか もしこれが虐待なら彼女を保護させて貰いますが構いませんか」
1 「それは困ります」
男 「じゃあお子さんをベランダから連れてきて貰えますか」
1 「それは困ります 夫の許しがないと お願いします」
男 「それでは私が直接行くのは問題ないですよ」
1 「どうぞ」
男 「……こんにちは」

女 「・・・」

男 「寒いね ママに外に出されたの」

女 「・・・」

男 「パパに外に出されたの」

女 「・・・」

男 「どうして外に出されたの」

女 「私がおもちゃを片付けなかったからです」

男 「良く言った よく反省した ほら中において 寒かったな」

男 「あなたが」

男 「父親です」

男 「あなたのお子さんが」

男 「いや躰の一貫でした やりすぎました」

男 「あの」

男 「本当行き過ぎました もうやりませんので今日のところは」

男 「帰れません」

男 「他所の人がウチの躰に口出さんで下さいよ やりすぎました 注意しますって言うてるじゃないですか」

男 「本当にもうやりませんね」

男 「パパ悪かったな 許してくれるよな」

女 「・・・」

女 「なあ」

女 「う うん」

女 「あー良い子だあとでプリンを食べような」

女 「ケーキも食べたい」

男 「じゃあママに言ってケーキ買って来て貰おうなーこれで帰ってくれますね」

男 「・・・失礼します」

女 「寝ろ」

女 「・・・夜寝ているとあの時あれで良かったのかと振り返ってみる でもとにかく寒かったから中に入ればそれで良いと思ったあの時 もしあの時喚き散らして助けてと叫んでいたら私の人生は変わっていただろうか」

女 「自分で変えてみるかい その先」

女 「あなたはあの時の」

女 「幸福の青い鳥さ 幸せな家から家へと飛び回っているのや」

女 「じゃあこも幸せな家だというの 教えてその価値観」
 5 「じゃあ君は幸福ではないと言うのかい 今が」
 3 「うわうわうわ」
 2 「・・・」
 女 「先生ありがとうございます」
 2 「二応精神安定剤を置いておきますので」
 1 「さすってさすって」
 女 「はいはいお母さん」
 1 「痛い痛い」
 女 「はいはいお母さん」
 1 「臭い臭い」
 女 「臭いね お漏らししたね 後で替えようね」
 1 「臭い臭い」
 女 「後で替えようね 後で」
 1・3 「・・・」
 1 「痛い痛い」
 3 「あうあう」
 女 「だめだよ お父さん、先生が外出ちゃだめだつて」
 3 「うあうあー」
 3 「うあ〜」
 女 「ダメだから大人しくして お父さん あつ」
 3 「うあうあ」
 女 「違うよお父さん私だよ お母さんじゃないよ 違うよやめてやめてやめてよ・・・」
 3 「・・・うあい〜うあい〜」
 女 「(電話) はい」
 男 「どうした」
 女 「何でも・・・お父さん暴れちゃって」
 男 「大丈夫」
 女 「大丈夫 今さつき薬飲んだから」
 男 「大丈夫」
 女 「大丈夫・・・(薬)」
 男 「何の音」

女 「何が」

男 「何でも」

女 「あのさ・・・結婚のことなんだけど」

男 「えっ うん」

女 「ちよつと急げないかな」

男 「え」

女 「つか急ごうよ 急いでゴールインしようよ」

男 「ねえ」

女 「ねえ遊び来てよ 実家に泊まってっよ今夜どうバレないって」

男 「あのね」

女 「何」

男 「迎えに行くから必ず」

女 「・・・」

男 「もしもし」

男 「もし・・・と仮定ばかりを繰り返す男と幸せになれるのいかい もしだよここに幸福の毒リンゴがあつたらだよ 君はそれを齧るかい」

女 「・・・」

女 「それとも齧らせるかい」

女 「・・・」

女 「あーあ・・・あー」

女 「お姉ちゃん良い加減にして」

女 「うるさい」

女 「うるさいじゃない いつまで引きこもってる気開けて ここ開けて」

女 「うるさい」

女 「あんたそれしか言えないの どんだけお母さん心配してると思ってるのよ」

女 「うるさい・・・死ね お前なんか死んでしまえ 出て出てけ」

女 「もうやめて もう良いから」

女 「ダメだよ お父さん死んでも もうお母さんしかいないんだよ」

女 「本当私がいけないの 私の育て方が間違ってたの」

女 「私はちゃんと育ったよ」

女 「本当本当 お前は良い子に育ったよ」

女 「じゃあなんであの人は」

女 「本当本当ありがとうね」

2 「私帰って良いの またすぐはいつて来れないんだよ」
1 「大丈夫だから大丈夫ですから」

3 「何が大丈夫なんだ またおもちゃ出しっぱなしじゃないか」
1 「だから押入れに入れて反省させてますから」
3 「そんなんじゃない反省ならんだろ 出る」
女 「うーわ」
3 「何でだ何でだ 何で約束破るんだ パパとの約束破っちゃいけないんだらう (殴る蹴る)」
1 「やめてやめてあなた」
3 「お前には関係ないだろ」
女 「関係ないわよ それでもやめてって言うてんのよ」
3 「やめて」
女 「お前が止めるのか お前のママじゃないんだよ」
3 「やめて」
2 「ふざけるな ふざけるな ふざけるな (蹴る)」
3 「もう蹴るな」
女 「・・・」
1 「・・・あ・・・」
3 「おいおい 触れって」
1 「ちよっと今のあなた」
3 「本気じゃねえよ 自分の子供本気で蹴る親がどこにいるんだよ 見たよな お前見てたよな おれ無
罪だよな」

1 「電話しよ 警察に」
3 「やめろお前」

2 「大丈夫ですか」
女 「すみません 疲れが少し出たみたいで」
2 「・・・」
女 「先生 これじゃ先に私のほうが潰れてしまいそうです」
2 「気持ちを強く持つて下さい」
女 「強く持つて 先生は家の外の人だからそう言う事が言えるんです」
2 「すみません」
女 「国はどうかしないんですか」
2 「は」

女 「こんな状況でも」

2 「何が言いたいのぞ」

2 「このままでは私が加害者になってしまう」

2 「あなたの親ですよ」

女 「わかってます この人の子供です なら私が決めても良いのでは」

2 「ママ」

女 「そのママが私をどれだけ苦しめるか・・・」

3 「うあうあ」

女 「お父さん・・・(首絞める)」

3 「うあうあ」

女 「苦しくない苦しくない バア 苦しくない苦しくない バア 苦しくない苦しくない・・・苦しんでよ 苦しいって言ってよ笑ってないぞ」

3 「あうあう」

女 「パパママもうお願いゆるして下さいお願いします 本当に同じことはしません許して下さいお願いします」

5 「良いのかい 今やらないとお前は一生こいつらのお守りをしなければならぬよ」

1・3 「・・・」

女 「リングを下さな」

5 「じわりじわりお前の首を絞める 真綿で首を絞められるように齧るのかい 齧らせるのかいそのリング」

女 「ああ・・・あ・・・(食べられない)」

3 「どうしたそのリングまたウチから盗んだのか」

女 「やめてやめてやめて下さいパパ」

1 「あなたやめて」

3 「うるさく」

女 「ここから誰か連れ出して」

5 「言ったねどうとうその言葉さあそこにいるのは王子様」

男 「迎えに来たよ さあこの家から出よう エラこんな継母にいじめられる家からおさらばせよ」

女 「・・・」

1 「痛く」

3 「うあーうあー」

2 「シラユキ 本当に置いて行くのかい」

女 「・・・ええ」

2 「出て行くのかい」
女 「・・・ええ」
2 「出て行けるのかい」
女 「ええ」
男 「さあ行こう 僕が幸せにするから」
女 「・・・」
男 「・・・どうしたの」
女 「やっぱり行けないわ」
男 「どうして 僕と行けば君は幸せなんだよ」
女 「・・・」
2 「お兄ちゃん」
女 「グレーテル」
2 「まだ今なら外には帰り道を印したパンのクズがある その檻から出よう 鍵はついてないよ こちら側には あなたはまたそうやって外に出たいと嘘をつく」
女 「私はエラ・・・ 灰かぶりのエラ 高い塔の最上階のその更にあるという屋根裏の住人 光はやめて」
1 「出たいのかい」
女 「ええ」
2 「出て行けば良い」
女 「ええ」
3 「鍵は空いてる」
女 「ええ」
5 「ガラスの靴で飛び出して」
5 男 「片方だけが落ちていた この片方を持っている者は」
5 女 「泥棒だ」
女 「えっ」
1 「誰だい勝手に食べたのは」
女 「私じゃない」
2 女 「お母さん お姉ちゃんがおもちゃとった」
女 「私じゃない」
3 女 「お前は何て子だ」
女 「誰か助けて」
1 女 「エラ」
女 「はーい」

1 「お腹が空いた」
女 「はいはい分かったからおむつ替えようねお母さん」
3 「あうあう」
女 「外に行っちゃダメ」
5 「本当は」
女 「え」
5 「帰って来なければ良いと思っていないのかい」
女 「違う」
2 「寝たきりです」
女 「いつまでですか」
2 「いつまでもです」
女 「・・・あああ」
2 「どこに行くのです」
女 「どこにも」
2 「お姉ちゃん出て来てよ いつまで引きこもってる気」
女 「違う」
3 「出て来い いつまでそんな所に隠れてる」
女 「あああ」
1 「あなたやめて」
女 「お父さんやめて私お母さんじゃないのよ」
男 「娘さんを保護させて貰います」
女 「やった〜」
1 「痛い痛い」
女 「お母さん大丈夫 どこにも行かないからね」
男 「何ですかこの痣 食べさせているのですか ガリガリで寒い冬空の中ベランダに放り出して」
人 「逃げて」
2 「逃げ切れるものならねえいつまで続きますこの介護」
人 「いつまでも」
女 「逃げて」
女 「逃げ出して良いものなら」
人 「幸せですか」
女 「幸せです」
5 「幸福の青い鳥」
女 「私は幸福です」

5 「本当に」

女 「幸福の降参です ねえ王子様早くここから私を連れ出して ねえ・・・私は誰ですか 私の名は」

男 「君はエラ」

5 「君は失敗作 もう嘘はやめよう」

人 「エラ」

女 「あゝお母さん」

1 「あなたは私の失敗作」

人 「エラ」

女 「あゝお父さん」

3 「あなたは彼女の失敗作」

人 「エラ」

女 「あー」

2 「あなたは彼の失敗作」

人 「エラ」

5 「彼はあなたの失敗作」

人 「エラ」

男 「私は彼女の失敗作」

人 「エラ」

1 「彼女はあなたの失敗作」

人 「エラ」

2 「あなたはあなたの失敗作」

人 「エラ」

3 「私は私の失敗作」

人 「エラ」

5 「あなたは誰かの失敗作」

人 「エラ」

女 「私は・・・あなたの失敗作 あー 死んでください お願いします」

女 近くに落ちていたストッキングを拾うと父親の首を締め上げる

自分を虐待してきた父に対する復讐なのか

介護に疲れて魔が差してしまったのかは分からないが

その姿はまるで真綿で首を締める様である

3 人

「・・・」

「エラ エラ エラ」

「あーあーあー誰もがその名で私を呼ぶ あーあーあー誰もがその名で私を呼ぶ そんな事はない 私
はここから飛び出すわ ガラスの靴を履いて 嘘じゃない 王子様の元に」

灰が降ってくる 時間の流れの埃のように

男

「それはガラスの靴ですか」

女

「ハイ」

男

「飛び出さないのですか それを履いて」

女

「ハイ 足に鋭く刺さるので ねえ・・・痛いよね」

5

「・・・」

男

「誰に話しかけているので」

女

「ネズミです」

男

「え」

女

「おかしいですか でないとこれは私の長い独り言になってしまう そんなただの頭のおかしい女
でしょ ところであなたは王子様」

男

「保健所の者です 近所の方から悪臭がするということで ご両親は」

女

「・・・さあ それよりお腹がすきました いつもならお母さんがドアの外まで持ってきてくれる
のですが いつからかもう音がしなくなってます」

男

「出ましようここから 手を引きます わっ」

女

「何に驚いていたので 私のこの老いたカオ」

男

「いつからここにいますか」

女

「さあかれこれ二十、三十年はここにいてはないでしょうか 親を巻き込んで」

男

「何かを待っているんですか」

女

「・・・」

男

「誰かを待っているんですか」

女

「・・・」

男

「なら」

女

「私はエラ このうず高い塔の最上階の更にある屋根裏部屋の住人 灰かぶり イプセンの人形
の家 ねえ一ついいですか この部屋入った方がいいがどうやって出ていくので」

男

「あのドアに手をかけ ノブを回し少し力をかけて押すだけです」

女

「ウンよ」

男

「ウンじゃない」

女 「そんな簡単なことも私にはできないというの それではもう私という人間は終わりじゃないですか」

男 「終わりじゃありません この部屋から自分の足で一步踏み出せば」

女 「無理です 私はただここに居続けることしかできないダメな奴なんです」

男 「人間に失敗作なんてありはしない」

女 「この私の力才を見て言えますか こんなに時間をかさねてしまいました あーお腹がすきました 食べ物を運んでくれるのはもうこの子だけ」

5 「・・・」

女 「最後までありがとうね（ネズミをかじる）」

男 「・・・」

舞台は見えない壁で囲まれている 役者はその壁を自由に行き来する事ができる

しかし現実には本当の壁がある

女優は外に出て行く事はできるが 少女達はそこから逃げ出す事はできないのだ

又 袖から壁を突き破り そこに助けに行くことなど出来ないのである

了